

ハードボイルド電車遅延

海底木魚





俺は孤独に歩き出す

ごくありふれた朝
気のふれた事故で電車が止まる
しばらく次の電車が来ない
というしけたアナウンス
都会じゃ十分遅れるだけで
リーマンがキレルには十分

しかし俺はキレない
次の電車も待たない
俺は慣れた足取りで
車両に列れを告げる

これからは
「自分の足で歩く」
そう心に決めたのさ

一駅分なら
俺の華奢な足ももつ
そういう判断さ

都会の片隅で
俺は歩き出す
まだ見ぬ宇宙に向かって



俺は決して慌てない

朝から電車が止まった
ただそれだけのことで
どいつもこいつも大慌て

そんなジャパニーズを尻目に
俺はゆっくりと歩き出す

俺は決して慌てない
俺はやつらとはジゲンが逢う

俺は夜勤明けだ

むしろこれから帰るから

やつらがせつせこ
出社に間に合わせようと
してる最中に
俺帰宅するから

こんな時ぐらいだから
夜勤の優越感って

俺は荷物を持たない

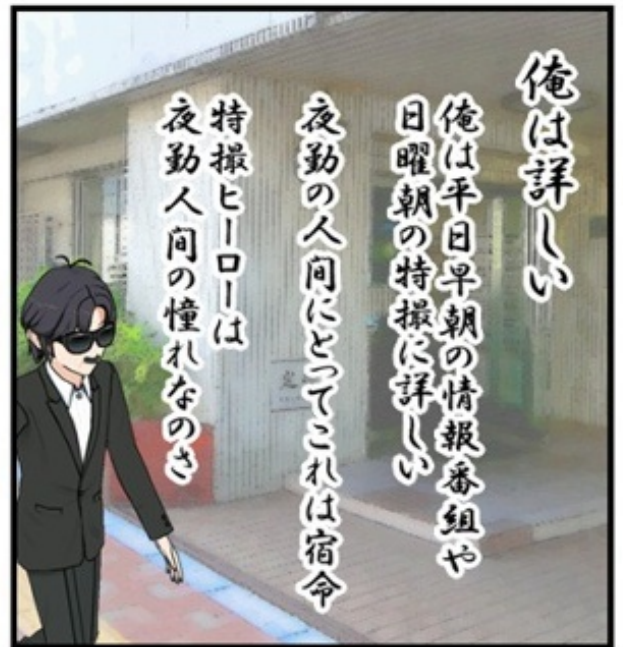
電車に忘れてきたわけじゃない
土産として置いてきたのさ



俺は決して振り向かない

俺は常に
前だけ向いて歩いてきた

昔から
そしてこれからもだ



俺は詳しい

俺は平日早朝の情報番組や
日曜朝の特撮に詳しい

夜勤の人間にとってこれは宿命

特撮ヒーローは
夜勤人間の憧れなのさ



俺はたまに振り向く

男は常に
マーメイドを
追い求め続ける
パイレーツなんだ

都会の海の真ん中で
ハッと振り返ることもある

今のはマブかった
今のはマブかった



俺は動じない

何事も
なかった
かのように
歩き出す術を
俺は身につけている
痛くはない
傷んだのは
このグラサンだけだ



俺も歩けば棒にあたる

よそ見をするな
という教訓を
身をもつて
通行人に伝えた



俺はグラサンをかける

普段は裸眼の俺が
グラサンをかける時

それは眩しいからじゃねえ

カッコつけるためでもねえ

俺が密かに
大好きな

アイドル

グループ

みゅ〜ず

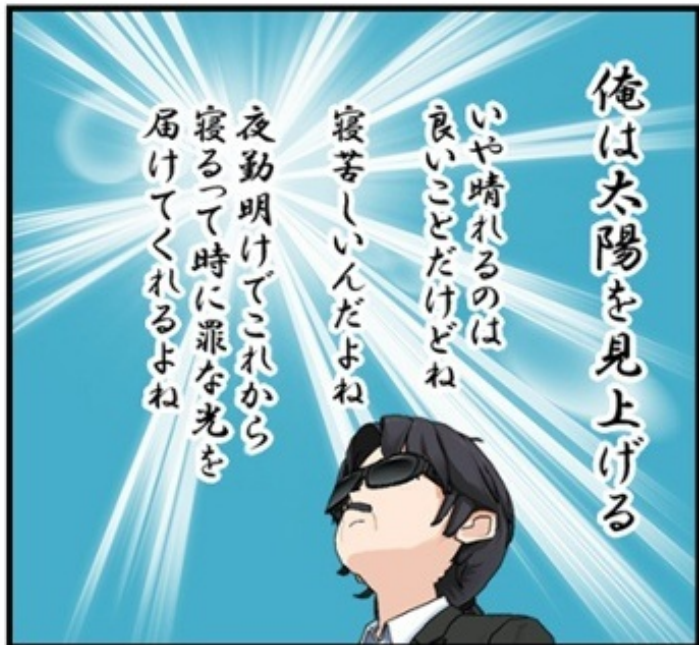
がグッズとして

グラサンを発売

する時だ

しかもこれツルに
なんかメッセージ
入ってるから

これをかけるって
めっちゃファンの度胸
ためされてるから

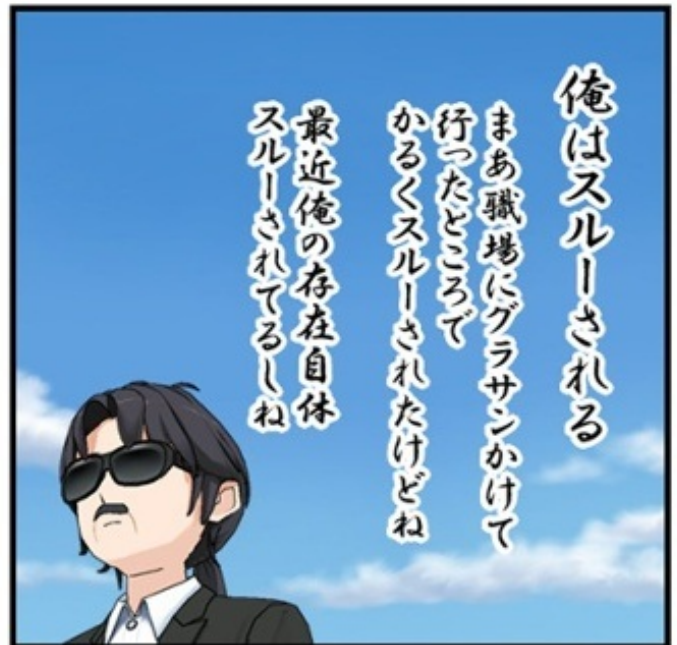


俺は太陽を見上げる

いや晴れるのは
良いことだけどね

寝苦しいんだよね

夜勤明けてこれから
寝るって時に罪を光を
届けてくれるよね



俺はスルーされる

まあ職場にグラサンかけて
行ったところで
かるくスルーされたけどね

最近俺の存在自体
スルーされてるしね



俺は汗ばむ

畜生

一駅分って意外と歩く

畜生

普段運動しねえから汗かく

畜生

スーツ思いから余計汗かく

そんな負の感情はもたねえぞ
畜生!

これは新しいウォーキングだ

畜生!

電車遅延ダイエツトだ

畜生!





俺は子供を送る母親を見る

独身の俺には
都市伝説のごとき風景

「坊主、母ちゃんを
大事にしるよ」
と心で念じる

つてか母ちゃん若い



俺は休む

俺は疲れたら休む
無理をしないで休む
それが俺のフリーダム



俺は雨に降られる

俺程こういう
シチュエーションが似合う
男はいないと思った

太陽に
見事裏切られた

いや俺が裏切つてやった
と思うことにした



俺は走る老人を見る

つてか朝からジヨギングつてめっちゃ元気だよ
つてかもう「ちゃん」付けて呼ばないよ
つてか「おじいちゃん」というよりもう
「おとつあん」ぐらいの勢だよ

俺は雨にぬれる



俺は雨がふっても傘などさささない
なぜなら電車に置き忘れてきたからだ

俺としたことが電車遅延ごときで
傘を忘れるなど

いや違うな

俺は見知らぬ誰かが雨にぬれないよう
そつと傘を置いてきたのさ

俺がぬれることで誰かの涙を守れるなら
それで充分さ

俺は考える

俺は人生を考える

雨にぬれて
歩くとき

遅刻しそうで
走るとき

なぜ俺は

この道を
自分の足で
進むのか

なぜ俺は

この道を
自分の頭で
選んだのか

俺は考える



俺は雨に立ち向かう

こんちくしよう

雨強いな

どうにかならねえのか
日本の梅雨

だが俺ほど

雨にも負けない精神の男は
いないと思う

雨にも風にも

電車遅延にも負けず
俺は立ち向かう

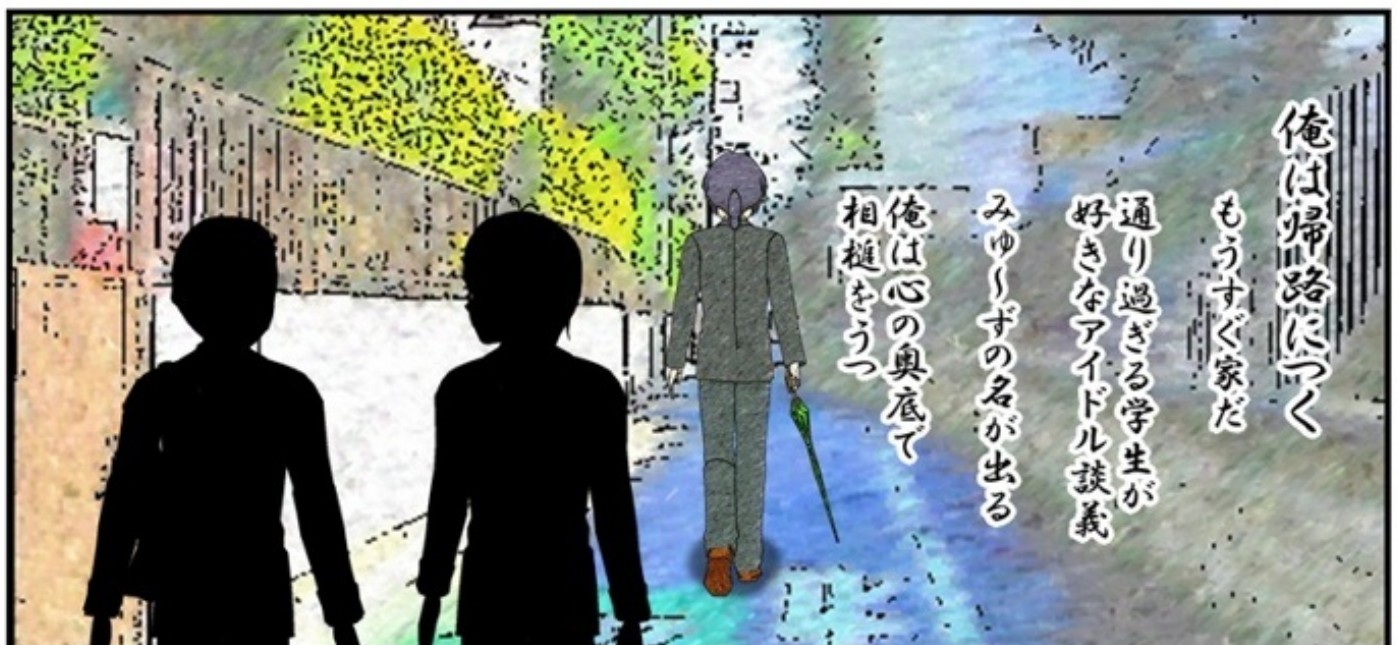
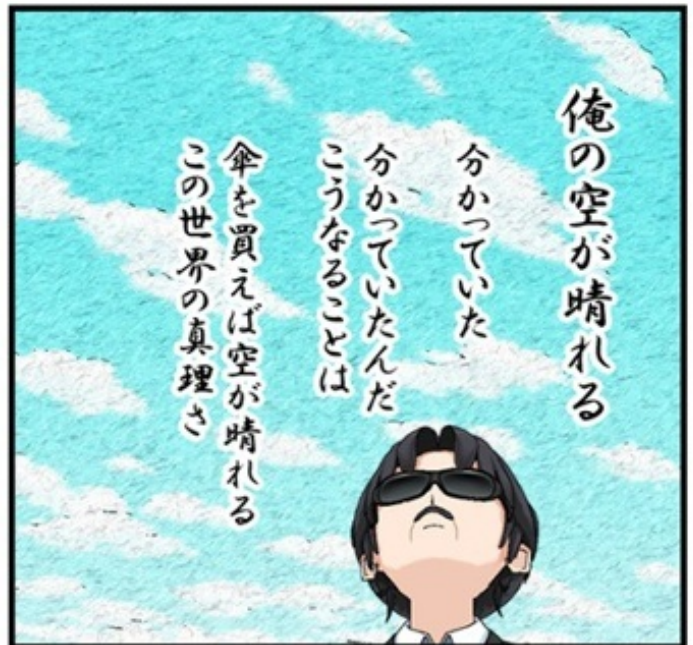
俺は立ち向かう

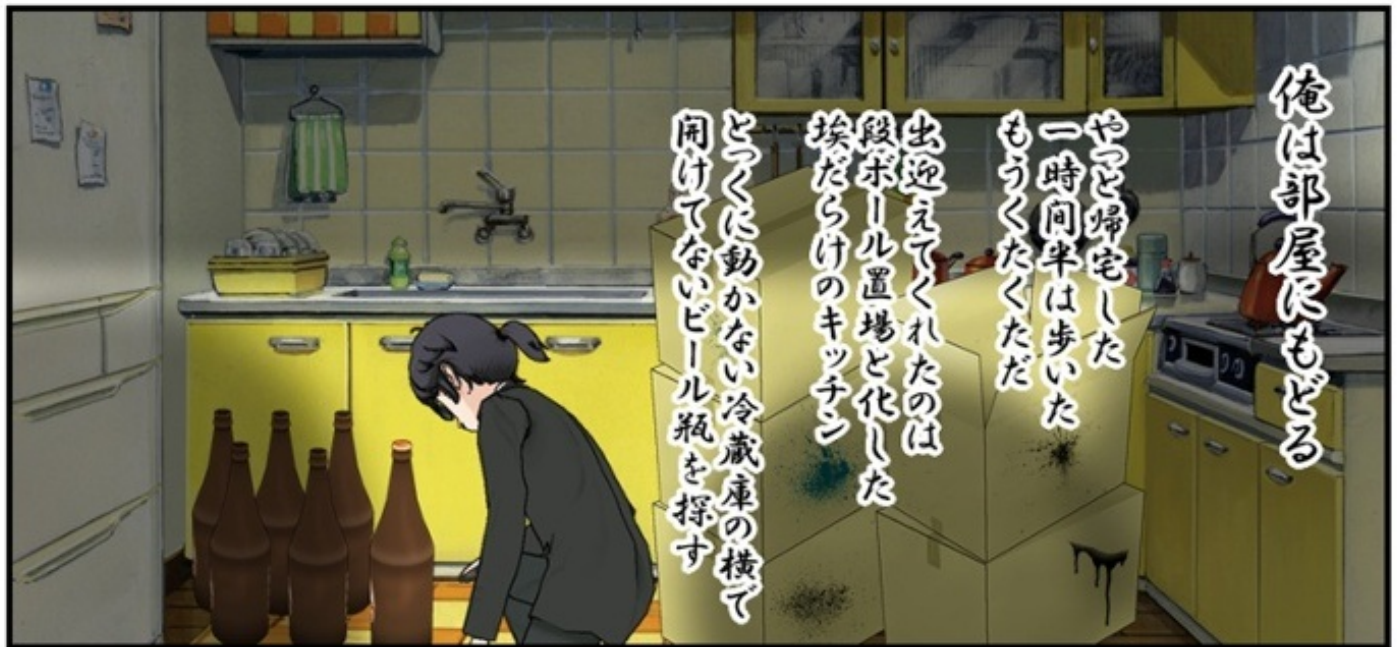
こんちくしよう

ますます強まる暴風雨
どうにかしねえと

俺の靴







俺は部屋にもどる

やっと帰宅した
一時間半は歩いた
もうくたくただ

出迎えてくれたのは
段ボール置場と化した
埃だらけのキッチン

とくに動かない冷蔵庫の横で
開けてないビール瓶を探す



俺は横になる

ひたすら
積んだ

DVD

CD

ゲーム

コンビニ袋

紙袋

ティッシュ

ノリバリ

ゴミの山

隙間に

ぼつかりてきた
横になる空間

これが

俺の故郷

俺の宇宙

俺のすべて



俺は気付く

垂れ流された
ネット情報から
みゆみゆの解散を知る

そこで俺は気付く
遅延していたのは
電車ではなく

俺の青春

だったことに
乗っていたのは
電車ではなく
作られた流行
だったことに

雨はやんだ
はずなのに
グラスが曇る



俺は外を見る

夕陽に照らされた
あじさいの上を
見すばらしい
カタツムリが
申し訳なさそうに
横切る
そんなにかしこまるな
と言いたい



俺は起きる

いつもどおり
気付いたら
寝ていて
気付いたら
夕方に起きる
今日は晴れたらしい



俺はまた歩き出す

俺は沈む夕日を見つめながら
いつもどおり職場に向かう
ふと
夕方の風景が視界に入る
子供の笑い声が聞こえる
豆腐屋のチャラメルが聞こえる
商店街のシャッター音が聞こえる
となりの日常が
遠い神話世界の
出来事のように感じられる
しかしまた
となりに日常があったことに
気付いたのも久しぶりだったりする
荷物は終着駅で見つけた
今日は良い日だ
今日は良い日だ

(終)